

看護労働環境への熱く、深い洞察を、 しっかり受け取りたい

[評者] 勝原裕美子 聖隷浜松病院副院長・総看護部長

看護師の働き方を経済学から読み解く

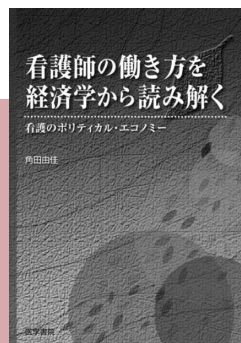
看護のポリティカル・エコノミー

角田由佳 著

A5判, 192ページ

定価 3360 円(本体 3200 円+税 5%)

医学書院 TEL. 03-3817-5600



■日々の疑問・悩みを経済学の視点で捉え直す

著者の角田由佳氏とは、もう 10 年以上も前からの付き合いだ。労働経済学を専門とする角田氏は、看護師同士で熱く議論を闘わせていると、「ちょっといいですか?」と、すーっと会話のなかに入ってきて、非常に素朴な質問を投げかけてくる。その疑問がいつも新鮮で、それをきっかけに論議がうまい具合に展開したり発展したりすることがよくあった。穏やかな人柄なので激することはないが、彼女の看護労働環境への熱く、深い洞察は、本書の随所にちりばめられている。

本書は 11 の章から成るが、大別すると 4 つのポイントがあると思う。第 1 点は、第 1 章「経済学からみた看護サービス」で代表されるように、一般的にサービスの特徴といわれていることが、看護サービスにおいてはどのように理解されるかという視点である。これが理解できれば、その後に続く章の理解が非常にスムーズである。

2 点目は、看護師の労働環境、特に賃金体系がどのようにつくられているのかという点である。角田氏は、診療報酬がどのような仕組みになっているのか、また、日本の女性の労働市場と対比して看護師の労働市場をどう考えるべきかなどに言及する。なかでも、看護師の労働力と労働環境について最も射ているのは、第 6 章のタイトルにも用いられている「労働市場における搾取」という表現である。看護師の賃金が上がらない仕組みについて、感情を抜きにして整然と述べられると非常に説得力をもつ。

3 点目は、看護師の仕事とはいったい何なのかという問いである。他の職種でもできることを引

き受けている現状や、看護師の能力や技術の評価が行なわれていないことなどが、看護の仕事をわかりづらくしている。そのことが、各種データを用いて論じられている。

■看護師は正当に評価されていないという現実

そして 4 点目は、看護師へのエールである。著者が本書を書ききったのは、自身も「あとがき」で述べているように、なぜ看護師は正当に評価されないまま看護をしなくてはならないのかという憤りが根底にあるからである。数々の統計データや研究結果をつなぎ合わせてみると、本書のように何が問題なのかが明確になる。

しかしそこから先は、看護師自身の仕事である。「看護師が自らの重要性を、そして技能を証明し、これが寄与するところの看護サービスの質とは何か、議論すべきときである。この検証作業があつてはじめて、看護師が社会から正当に評価を受け、よりよい看護を実現することができるのではなかろうか」(171 頁)。この言葉は、本書を看護書として出してくれた著者のバトンであり、受け取った私たちは、間違いなく目的に向かって走らないといけない。

経済学というと、少しおそれをなすかもしれないが、本書が上記のようなテーマをもって書かれていることを知っておけば、何度も出てくる需要と供給の曲線も理解しやすい。看護学生、臨床の看護師、管理者、学者、政治家など、それぞれの立場で手にしてほしい一冊である。